アリグル広場で考えること

上村祥二

僕のアパルトマンの隣りにあるアリグル広場は、昔ながらの朝市がいまだに健在なので有名である。「昔ながら」というのは百年余前の絵ハガキを見つけたが――あまりの高価さに、入手には及べず――、今とまったく同じといった朝市の賑いが写っていた。勿論市場で働く人びと、買物客の服装は間違いもなく百年前のもので、何よりカメラを意識している人びとの緊張した、そして晴れがましそうな表情が懐しい光景をかもし出している。先日もTVか映画の撮影を見かけたが、俳優の服装からして戦前を撮ろうとしているのはすぐにわかった。食料品が主、それに花や雑貨が所せましと並べられ、そのいずれもが実に安い。同種のムフタールの市場が今や観光化していささかとりすまし、それだけ何もかも高めになっているのとは対照的にここはまだ街の庶民の毎日の生活の場。その安さから、車で買い出しに来たレストランのオヤジやその手伝いの若い衆、一週間の食料を買い求めている一家連れをよく見かける。勿論僕のようにその昼、夕の食事の材料を買いに来ている近所の人達も。とにかく土曜日、日曜日には人がもり上って見える。そのなかにはいると進むのもなかなかままならない状態となる賑いである。とにかく「有名」なのは、大家さんが最初にアパルトマンの所在を「あのアリグル広場」横、と紹介したし、僕から住所を聞いたフランス人は皆アリグル広場の朝市は安いでしょう、と言ったことでもわかる。

いろいろ教会離れが言われても、なおやはりカトリックの国らしく日曜日にはデパートからスーパー、個人商店がほとんどすべて閉ってしまうなかで、ゴミの市も併せて開かれるこの朝市は格好の気散じ場である。毎日の食料品買物の他に、ゴミの市で雑本も何冊か求めた。そのなかで、しかしプルードンの妻への書簡集は、一九世紀の社会主義者のなかではアンチ・フェミニストとして日本の女性研究者の間では評判の悪いプルードンの、そのアンチ・フェミニズムの内実を妻への日常的態度から知り得た気持になって面白く、これは僕には掘り出しもののの

一冊だった。

安い食料品、ゴミの市の面白さを書きたかったのではない。この朝市ですぐに気付いたのは、それはその後何人かの日本人の友人を案内した折の彼らの言うところも同じだったが、店の売り子、客の多くが先祖伝来のフランス人とは思えない人びとだということである。アラブ系と思われる人が多く、他に中国人あるいはヴェトナム人。それは朝市の仮設店舗の背後にある常設店も同じことで、店主、売り子は勿論のこと店の看板からしてOriental, musulmane, tunigie, marocaine などの形容詞をかかげる。ある日散歩がてらかぞえてみるとざっと三分の一がそうだった。アラビア文字をかかげる店もいくらかある。そう言えば日曜日にいつも同じ場所に立つので今は顔もおぼえてしまった乞食さんも、物乞いの言葉をフランス語とアラビア語の両方で併記した紙切れを首にぶらさげていた（フランス語を読んでアラビア語の方を勝手に「推察」しているだけであるのは勿論のこと）。客と売り子のやりとりはいうまでもなくフランス語であるが、売り子同士、そしてとりわけ立話しをしている人びとの言葉はたまにそれとわかるイタリア語もあるが、大方はアラブ系であろうと勝手に推測しているが皆目わからない。今フランスに多くの移入民があること、その人たちが当然出身地ごとにあつまって住むこと、その最たる地がパリ、それも巨視的にはこの北－東－南の外縁地帯であること等々の予備知識なしにいきなりこのアリグル広場におろされた人は、目の前の光景を巴里のものとは信じられまい。

四月、五月の大統領選挙で移入民を締め出し、「フランス人」のフランスを回復せんとのスローガンでルペンとそのフロン・ナショナルは、第一回投票で実に十数％の票を獲得し、フランス人にも人種差別の輿論が抬頭したと、内外の人びとを慌てさせた。彼らは主張する。いまやフランスにおける「フランス人」の人口は日に日に希薄化していっている。人口流入によって、ついで流入人口の多産性によって。ある右翼誌の「主張」によれば、三〇年後の二〇二〇年には地中海の南側からの人口は三五〇〇万人、それに対し北側の人口は一六〇万人になる勘定らしい。脅しともとれるこの感情的「主張」にフランス人の多くが冷静に対応したことは六月の総選挙におけるフロン・ナショナルの惨敗（得票率一〇％弱）が示すとうりである。といってフランス人が悩んでいないわけでは決してない。その悩みの所在と

深刻さは右翼の主張の虚構性がかえって浮彫りにする。

まず主張の前提となっている「フランス人」、「フランス文化」の一体性についての独断性、ついで二世、三世が文化的出自のオリジナリティをいつまでも保持しつづけるという予断性。

「一にして不可分のフランス」なるものがはたして実体として存在するのか。海外県は別にして、フランスのなかにフラマン語、ブルトン語、バスク語、オクシタン語、コルシカ語、アルザス・ドイツ語を母語とする人々、いわゆる少数民族が存在し、その文化的権利を主張していることは政府も承知で、公教育のなかにそれぞれの語学教育を組み入れている。（勿論それで事が済むには程遠い。権利拡張から、自治権の獲得さらには分離独立までさまざまな運動が活発である。）

この「一にして不可分のフランス」が歴史的神話であることを追求した著作を最近相次いで入手した。Colette Beaune, *Naissance de la Nation France*, Éditions Gallimard, 1985. Suzanne Citron, *Le Mythe Nationale*, Éditions Ouvrières, 1987. 前者は「一にして不可分なるフランス神話」が、歴史的に形成されて来る時期とそのプロセス、形成主体を実に丹念な史料、文献の渉猟によってフォローしたものである。同書でボーヌ女史があきらかにしてゆくのは、実体的フランス王国の形成のなかで、すなわちヴァロワ朝それもすぐれて百年戦争を生き永らえた一五世紀に「一にして不可分のフランス王国」の主張が顕著になり、一六世紀王権の伸張と王国の安定とともに確立したこと、その場合教会人がイデオローグとなってフランス王国、国王を聖化していったことである。そしてその「聖化」は歴史を遡行して行われる。聖クロヴィス、聖ルイの「誕生」等々。すなわち神話の成立である。勿論それは王国の各地域、民衆に影響を及ぼし、受容されてゆくゆえに神話なのであるが、しかしまた神話であるかぎりその受容が完全なものとなることはない。

教会から聖別された王を統合のシンボルとするこの「一にして不可分のフランス」の歴史が、フランス革命のイデオローグによってついで一九世紀の共和派、リベラル派の歴史家によって「同質的フランス国民」の歴史と重ね併せて、しかも検証なしに学校教育のなかで強力に推し進められた（今日ではその推進者が右翼に転換している）のであると、「神話」の虚構性と政治性を、それ自身今日的政治主張の色あいをまとうことに臆せず展開したのがシトロン女史の著作である。「フランス史学

の創設者達は、フランス史が統合的であることを欲していたが（実際は）グルイエール・チーズのように我々の記憶には（いっぱい）穴があいている。」「フランス社会は現在と同じく過去においても、多様な要素からなった複雑なものである。」フランス国民なるものは「坩堝 melting pot」のなかで、まさしく歴史的に「リグリア人、イベリア人、ケルト人、ローマ人、フランク人、ブルトン人、西ゴート人、東ゴート人、ブルグント人、フン人、バスク人、ノルマン人、アラブ人、ベルベル人、ハンガリー人、ユダヤ人、ポーランド人、ロシア人、スペイン人、イタリア人、ポルトガル人、アンティール諸島人、マグレブ人、ヴェトナム人……」がそれぞれのオリジナリティは失うことなく、合わさって創りあげて来たものであり今後もその方向ですすむのだ、というのが同書の結論的主張である。シトロン女史の結びには、先にあげた右翼の主張への第二の疑問（予断性）に対する断乎たる返答がある。今日のフランスが移入民のひきおこす人種の問題に悩んでいてもそれは産みの苦しみであって、過去のフランスが実に多様な人種的構成要素から成って来たように将来のフランスもさらに新しい要素を加えて日々新しく創られてゆく、というその将来展望は楽観的にすぎるだろうか。最後にもう一冊、社会学のアプローチからなる、しかし同様の将来展望を有す著作をあげて筆を擱くことにする。そのタイトルも『フランスという坩堝』という今春公刊なった Gérard Noiriel, *Le Creuset Francais: Histoire de L'immigration XIXe-XXe siècle*, Seuil, 1988. は一九世紀の主としてベルギー人とイタリア人の移入から二〇世紀のスペイン人、ポルトガル人、ポーランド人さらには最近のアルジェリア人、モロッコ人等々の移入とフランス社会の対応の歴史的変遷を検討して、フランス社会において移入民は労働力として経済的に必要、有益な存在だったのみならず、それ以上に文化的にも多様で豊かなフランスを創り出すに与って大きな要素だった、と述べる。確かに学問の世界だけでもエリアーデ、プーランザス、アブ・デル・マルク等々外国出身でフランスで活躍した世界的学者の名前が容易に浮かんでくる。

現在のフランス人の三分の一は曽祖父まで遡ると外国人であったという事実をふまえても、第二次世界大戦以前の移入民がキリスト教徒それもフランス人と同じカトリックであったこと、それに対し今日の移入民はイスラムを主とした非キリスト教徒であり、その文化的距離の

大きさはさまざまな文化摩擦をひき起し、問題をやはり深刻にしていることは否定できない。僕のアパルトマンの下の階がイスラムの集会場になっていて時どき集団でのお祈りの声が聞えるが、五月の一夜、一晩中の祈り、歌、会食、談笑があって（多分断食あけと思う）、結局ほとんど眠れなかった。もっとも他の住人から苦情が出ている様子はない。いずれにせよ「将来」はまさしくフランス人と移入民が倶に担う課題である。

政治的に、社会的にますます大きくなる移入民をめぐる論議のなかで、真摯な学問的作業もいよいよ始められた。翻って日本の歴史について、そして現在の社会と将来について考える姿勢においてわれわれは恥じないものがあろうか。このところアリグル広場の人の群れを見るたびに、しきりと考えさせられている。

le 10 août 1988,

101, rue de Charenton にて。